

スポーツ活動への参加が肢体不自由特別支援学校の児童生徒 とその家族の心理に及ぼす効果

～ゴロ野球チームへのアンケート調査を通して～

Psychological Effects of participation in sports activities for children and their
families in a special-needs education school for physical handicap

和	史	朗 ¹⁾	松	村	美佳子 ²⁾
Shiro		NIGI	Mikako	MATSUMURA	
阿	部	達彦 ³⁾	瀧	澤	聡 ¹⁾
Tatsuhiko		ABE	Satoshi	TAKIZAWA	

I. はじめに

笹川スポーツ財団(2013)が行った「特別支援学校のスポーツ環境に関する調査」によると、全国の肢体不自由者を教育する特別支援学校(以下、肢体不自由特別支援学校)の運動部活動・クラブ活動の実施率は、中学部で18.9%、高等部でも22.3%であり、聴覚障害や視覚障害、知的障害等の他障害種の特別支援学校と比較しても極めて低い割合となっている。この調査で運動部活動・クラブ活動を実施していると回答した肢体不自由特別支援学校においてさえ、中学部・高等部段階で半数以上の学校が取り組んでいた種目は、陸上競技、ボッチャ、ハンドサッカーの3種目のみに限られていた。肢体不自由特別支援学校においては、在籍児童生徒の障害の重度重複化、多様化が顕著であり、文部科学省が

平成25年度に実施した調査では、児童生徒の77.4%が重複障害学級に在籍していた(文科省, 2014)。この調査結果は、肢体不自由特別支援学校においては、重度運動障害のある児童生徒が多く在籍しているという実態から運動部活動・クラブ活動が実施されていないことや、これらが実施されている学校においても実施種目は極めて限られているという現状を表したものと言える(和, 2015)。

スポーツを通して得られる爽快感や達成感、連帯感に障害の有無は無関係であると考えられ、肢体不自由特別支援学校に在籍する重度障害のある児童生徒にとってもスポーツへの参加機会は不可欠なものであると思われる。しかし、上述したような活動機会の少なさ、情報の少なさ、障害の状況によって子ども達がスポーツを諦めてしまっている状況も予想される。

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北翔大学大学院生涯スポーツ学研究科

3) 北海道夕張高等養護学校

和 (2011・2015) は、これまでに肢体不自由特別支援学校の児童生徒を対象として、どのような重度障害があっても、個の障害特性に応じた個別ルールを適用することで誰でもが参加可能な「ゴロ野球」の取り組みについて報告してきた。

肢体不自由特別支援学校の児童生徒がスポーツ活動に参加することで、児童生徒本人やその家族の心理にどのような効果が認められるのか検討することの意義は大きいと思われる。

Ⅱ. 目的

肢体不自由特別支援学校のゴロ野球チームに在籍する児童生徒及びその保護者にアンケート調査を実施し、ゴロ野球の取り組みが選手本人や家族の心理にどのような影響を与えているのか調べ、特別支援学校に在籍する肢体不自由のある児童生徒のスポーツ活動への参加の意義や効果について考察することを本研究の目的とした。

Ⅲ. 方法

1. 対象チームの概要

第一著者である和が監督を務めていた札幌市内の北海道立肢体不自由特別支援学校（以下A特別支援学校とする）のゴロ野球チーム（以下Aチーム）を調査対象とした。Aチームは夏休み等の学校休業期間を除いて、毎週1回金曜日の放課後に定期的にゴロ野球の練習を行っていた。Aチームでは通常の練習以外にも休日の強化練習や合宿、その他、夏祭りやクリスマス会等の季節イベントも実施していた。指導には第二著者の松村も入っていた。

その他、A特別支援学校の教師や学生ボランティアも指導や支援にかかわっていた。

2. アンケート調査対象及び調査方法

2015年にAチームに在籍していた17名の選手とその保護者にアンケート調査を依頼した。チームには小学部低学年の児童も含まれていたため、選手用アンケートは各選手の発達段階も考慮した内容とした。また、筆記等が困難な児童生徒も多く含まれていたため、保護者による聞き取りに基づく代筆も可とした。ただし、その際にも本人の意思が十分に反映されるような配慮を保護者に依頼した。

Ⅳ. 結果

1. 児童生徒の概要

選手、保護者ともそれぞれアンケートを配布した17名中16名からの回答を得た（回収率各94.1%）。保護者アンケートは全員が母親による記入であった。

回答者の内訳は、男子11名、女子5名、所属学部は、小学部7名、中学部4名、高等部5名であった。回答者には普通校に転校した後もゴロ野球を続けていた2名も含まれていた。選手が所持していた身体障害者手帳の等級については、1級が10名、2級が3名、4級が1名、無回答が2名であった。療育手帳はA判定が6名、B判定が1名、判定なしが5名、記載なしが4名であった。障害名は、脳性麻痺が多く9名、二分脊椎・水頭症が2名、その他の疾患によるものが2名、無回答が3名であった。

2. 選手アンケートの結果

【質問1】スポーツは好きですか。はい／いいえ に○をつけてください

【回答】16名全員がスポーツが好きであると回答した。

【質問2】好きなスポーツはなんですか？1位～3位まで3つえらんで、ばんごうできにゅうしてください。

- ①やきゅう ②テニス ③りくじょう ④すいえい ⑤スキー ⑥ポッチャ ⑦たつきゅう ⑧サッカー ⑨バスケットボール ⑩バレーボール ⑪とくになし ⑫そのほか（ ）

【回答】16名中14名（87.5%）が野球を1位に選択した。

【質問3】ゴロやきゅうをはじめてたりゅうはなんですか？あてはまるばんごうすべてに○をつけてください。

- ①やきゅうがすきだから ②おともだちからのしょうかい ③ごろやきゅうをけんがくして ④がっこうのせんせいのすすめ ⑤おやからのすすめ ⑥スポーツをしたかった ⑦ゴロやきゅうがたのしそだった ⑧じぶんにもできるとおもった ⑨なんとなく ⑩そのほか（ ）

【回答】⑦の「楽しそだった」を選択した児童生徒が最も多かった。③の「見学して」、⑧の「自分にもできると思った」など、実際に練習の様子を見て決めた選手が多いこ

とがわかった（図1）。

【質問4】ごろやきゅうは すきですか？ はい／いいえ に○をつけてください

【回答】16名全員が「はい」に回答した。

【質問5】やりたいポジションはどこですか？1位～3位まで3つえらんで、ばんごうできにゅうしてください。

- ①ピッチャー ②キャッチャー ③ファースト ④セカンド ⑤ショート ⑥サード ⑦レフト ⑧センター ⑨ライト ⑩2るいベース ⑪ピッチャーよこ（1るいがわ） ⑫ピッチャーよこ（3るいがわ） ⑬どこでも

【回答】ピッチャーを選んだ選手が7名と一番多かった。それ以外は普段自分が守っているポジションを選択した選手が多かった。

【質問6】あなたが ちからを いれているれんしゅうは どれですか？あてはまるばんごう すべてに ○ をつけてください。

- ①ランニング ②キャッチボール ③しゅびれんしゅう ④だけきれんしゅう ⑤レインボーズ（OBチーム）とのれんしゅう ⑥そのほか（ ）

【回答】打撃練習を選んだ選手が最も多かった（図2）。

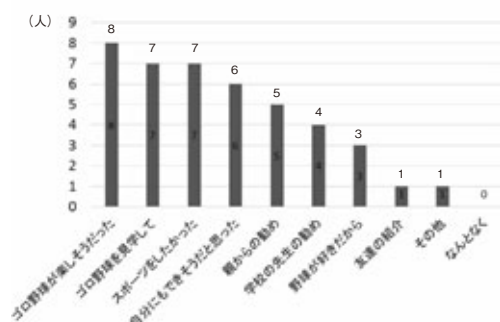


図1. ゴロ野球を始めた理由（選手）

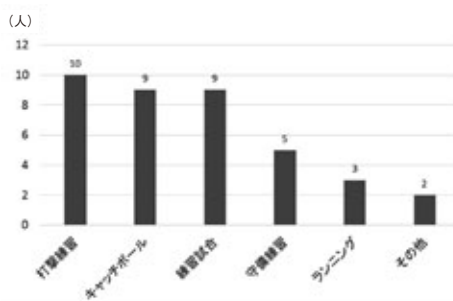


図2. 力を入れている練習（選手）

【質問7】もっとれんしゅう したいですか？

【回答】もっと練習したいと回答した選手が8名、現状の週1回の練習で良いと回答した選手が8名であった。もっと練習したいと回答した選手のうち7名が週2回の練習を希望し、残りの1名は週5回の練習を希望していた。

【質問8】いつまで ゴロやきゅうを つづきたいですか？

【回答】高等部（高校）を卒業するまでと回答した選手が3名（18.8%）、高等部（高校）卒業後も続けたいと回答した選手が13名（81.3%）であった。

【質問9】好きなプロやきゅうチームと あこがれているせんしゅを おしえてください。

【回答】北海道日本ハムファイターズを挙げた選手が11名であった。メジャーリーグの球団をあげた選手もいた。特に好きなチームはないと回答した選手も4名いた。

好きな選手の第1位は北海道日本ハムファイターズの大谷翔平選手で6名、第2位が同じく北海道日本ハムファイターズの中田翔選手で2名であった。

【質問10】じゅうきじゅつです。ゴロやきゅうについて おもっていることをなんでもかいてください。

【回答】一人の選手による複数の回答もあった。これら全ての回答を4つのカテゴリーに分類して以下にまとめた。

(1) 意欲・関心等に関する内容 (16件)

- ・「楽しい」「楽しみ」というワードが入っていたもの：7名
- ・「もっと練習したい」「～～をやりたい」というゴロ野球への意欲に関するもの：8名
- ・その他「野球に興味を持てた」：1名

(2) 技能に関する内容 (5件)

- ・～さん（OBチームの強打者）をたおしたい
- ・ピッチャーをもっとうまくなりたい
- ・しゅび（でボール）をはやくとれるようになりたい
- ・ばっていんぐがもっともっとれんしゅうしたいです（うまくなりたい）
- ・投げる練習を頑張っています（保護者代筆）

(3) 思考・感情等に関する内容 (6件)

- ・まけたらかなしい
- ・ユニフォームがうれしい
- ・～くんすごい
- ・～ちゃんのピッチャーのボールがすごい
- ・やきゅうをおしえてくれてありがとう
- ・中学部や高等部の人たちとも交流できたので監督や学生などのみなさんに感謝しています。

(4) 人との関わりやコミュニケーション (5件)

- ・ゴロ野球を通して色々な人と関わりを持ててよかった
- ・チームで一つの目標に向かってプレーするのが楽しい
- ・学校で大好きな先生が来てくれるのでうれしい
- ・（自分の所属する）学部以外の人と交流できた
- ・みんな違った障害をもっているけど、同じ目標にむかって1人1人できるはんいですがんばっていることがすごいいと思います

(5) 知識や理解に関する内容 (1件)

- ・野球のルールを覚えることができた

3. 保護者アンケートの結果

【質問1 及び回答】子どもの基本状況について、性別や所属学部、所持している身体障害者手帳の等級、障害名等について質問した。回答は上述した「児童生徒の概要」の通りであった。

【質問2 及び回答】子どものゴロ野球歴について質問した。ゴロ野球を始めて2～4年の選手が11名を占めた。5年以上続けている選手も5名おり、小学部から始めて9年になる選手もいた。

【質問3】子どもがゴロ野球をはじめた理由について（複数回答）

【回答】一番多かった回答は「参加できそうなスポーツはゴロ野球であった」であった。続いて、「子どもにスポーツをさせたかった」「余暇活動の1つとして」という結果になった（図3）。

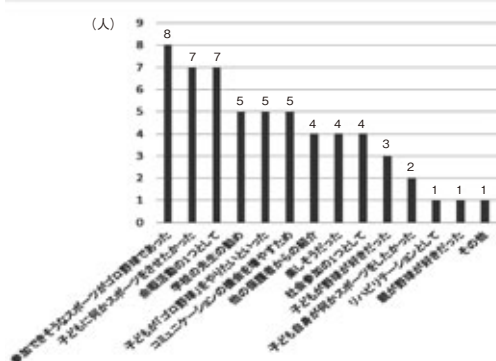


図3. ゴロ野球を始めた理由（保護者）

【質問4 及び回答】お子さんはゴロ野球が好きだと感じるか質問し、16名全員が好きであると回答した。

【質問5 及び回答】ゴロ野球の実施頻度について質問した結果、14名（87.5%）が現状の週1回が適切であると回答し、2名（12.5%）が週に2～3回の実施が適切であると回答

した。

【質問6 及び回答】ゴロ野球歴以外のスポーツ歴（種目、期間、大会出場の有無）について質問した結果、陸上競技、水泳が多かった（図4）。陸上競技では大会への出場も見られたが、その他の競技では大会への出場はなかった。

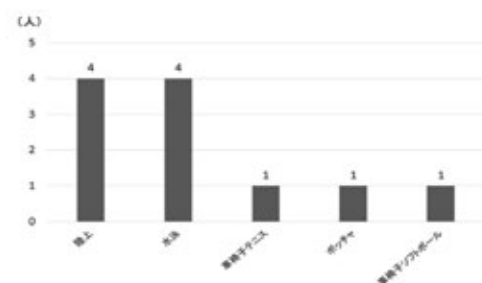


図4. ゴロ野球以外のスポーツ歴

【質問7 及び回答】子どもにさせてみたい競技はあるか質問した（複数回答可）結果、ボッチャ、陸上競技などをあげた保護者が多かった（図5）。

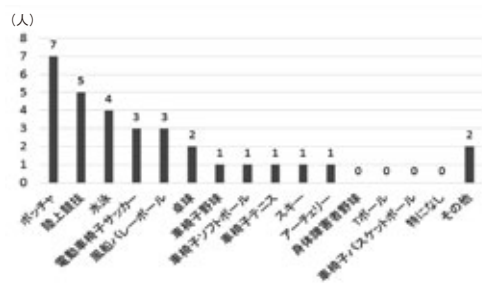


図5. 子どもにさせてみたい競技

【質問8】ゴロ野球を始めてからの子ども自身や周囲の人たちの変化について（自由記述）

【回答】

- ・本人はルールも含めて、今、何をするのか覚えてきたと感じています。
- ・小学部の先輩、中学部、高等部の方々とのつながりができた。
- ・最初の頃は、母親に連れてこられてなんと

- なくいる、知っている顔があると遊ぶ程度だった。監督に名前を呼んでもらったり、ほめられたりすることで準備体操など興味のあるものはやっている。守備はまだただだけど、バッティングやピッチングはまわりのアドバイスを聞いて取り入れるようになった。
- ・人見知りが激しかったのですが、3年間やっていく中ですごく積極的になり、自分以外の事に目を向けることができるようになったり、声をかけ合ったりと成長したことがたくさんありました。一番の変化は、喜怒哀楽がはっきり出せるようになったこと。1年目は悔し涙を流すことはなかったけど、2年目は大泣きでした。それをみてもものすごく成長を感じました。
 - ・周りの人も含め、プロ野球に興味を持つようになった。実際に札幌ドームへ行って応援をするなど外出が増えた。また、今までどこかへ出掛けても見ているだけだったり、車椅子での移動が難しく行けない所も沢山あったが、野球観戦という楽しみが増えた。
 - ・自分の体で動きが悪い所が出てきたら、リハビリを頑張ったりして体を整えようとするが増えてきました。
 - ・自分から積極的に集団の中に入るのが今までは苦手でしたが、ゴロ野球の時は自ら皆の輪の中に入ることができています。
 - ・出来ないからと諦めたりせず、目標を持ち努力することを学びました。
 - ・活動の幅が広がりました。中1の頃までボールを手から離す事や前に投げることも難しい状態でしたが、当時、投手に憧れかなり投球練習をしました。今では当時程苦労せず前方にボールを投げることができるまでに成長しました。
 - ・自分にも取り組めるスポーツがあることで、自信につながっていると思う。
 - ・「野球」というワードで色々な人と会話を楽しんでいる。
 - ・自分中心で周っていたものが、本人の気持ちだけでは動かないことをゴロ野球のチームの中で少しずつ学習してきているように思います。自分にできることが周囲の子たちにできないことに気がつくと進んで手をさしのべることも見受けられます。祖父も、孫と野球をすることが出来て大喜びです。投球フォームの指導やグローブの手入れなど楽しそうにやっていて、見ていてもほほえましいです。
 - ・子どもの身体的変化がすごかったです。ボールを投げることができるようになった。加えて、コーチから「肩をあげて上から腕を振る」等の指導にこたえてできるようになった。自分の目指す先輩を見つけてマネをするようになった。療育施設でのリハビリにも目的をもって取り組めるようになった。PT、OTでもボールが投げられるようになる、バットの振り方、姿勢の保持等、目標にすることで、子供のリハビリに対する取り組みが良くなった。療育施設にもゴロ野球のコーチがいるので入院してもゴロ野球を通じていろんな情報を得ることができた。
 - ・「ゴロ野球の仲間」という意識が高くなり、助け合いや協力するという気持ちが出来てきたように思います。声が出ていなかった子供達も、声がきけるようになってきました。楽しそうな声を聞くと、見ている母達

も嬉しくなって笑顔になります。

- ・今では練習を楽しみにしています。知らない集団が苦手なので、1人ずつ名前を覚え知っている集団にしたり、失敗を極端に嫌がるので「大丈夫。練習すれば上手になるよ」と声をかけたり、色々な工夫も必要でしたが好きになってくれてよかったです。今でも疲れたと言って休むこともありますが、その間に上手くできない悔しさの気持ちの切替をしたりと、自分の中で解決する方法を模索しているようにも思えます。先日チームメイトと作っていた新聞、親には見せてくれないんですよね。自分の世界を少しずつ作っているのかなと見守っています。
- ・兄も野球をやっていて、同じスポーツを自分は歩いたり走ったりはできないけど、野球ができるんだ！と自信になっていると思います。一応夢はプロ野球選手！だからゴロ野球は子どもの夢につながっていて、なくてはならないものです。とても練習は最後まで集中できていないのですが・・・。
- ・出来ることが増えました。足、腰が鍛えられ、丈夫で強くなった。ボールを見るようになった。これらのことで学校の先生達もほめてくれます。親もビックリするくらい成長しています。
- ・出来ないことが当たり前というか、普通だった。何をしても健常児と比べてしまい「やりたい」「やらせてみよう」という気持ちもなかった。「うちは・・・やりません」が家族もまわりも本人も普通だった。野球をはじめののも最初は反対でした。あんなに上手にできるわけないし、本人に負けたくない、頑張ってみたいという気持ちが少し

もなかった。でも続けているうちに、今まで感じたことのないチームワーク、協力する事、頑張れば上手くなる事、出来なくて悔しい気持ちが本当に成長したと思う。一番嬉しかったのは父かもしれません。2人でキャッチボールをしたり、速い球の研究をしたり。父として接していたけれど、どこかで「無理だよ、できないよ」と思ってやらせない事が父の優しさと思っていたところを共通の思い「うまくなりたい、もっとうまくさせたい」がとても良い関係になったと思います。技術ばかりではなく、精神的に私も家族も親戚も変わりました。

【質問9】ゴロ野球はお子さんにとってどのような意味合いを持っていますか（自由記述）

【回答】

- ・大好きな監督や友達、仲間と一緒に同じ時間が共有できる大切な時間。
- ・色々な人とのつながり。
- ・学年関係なく、お友達と仲良く活動し、目標に向かって頑張れる場所。
- ・とにかく「楽しみ」であることが一番。モチベーション。
- ・週に1回の練習は、子どもにとって大きなものになっています。金曜日、病院の受診などで学校に行けなくてもゴロには行く！！ってぐらいです。チームメイトとの結束も強く、監督や支援者にすごく信頼感を持っているので、自分でもいろいろ考えて意見を言ったりできる場なんだと思います。
- ・体力を向上させるためというものもあるが、障害によって色々な制約がある中、本人が一番楽しいと思える活動。年齢も関係

なく、障害の程度も関係なく参加できるので自然と助け合いの心がうまれる。自分が必要とされる居場所があるという安心感があるように思う。

- ・いつもと違った集団の中でも楽しく参加できていると思います。最初のうちは、ただその場にいただけという感じでしたが、最近は積極的に競技に参加しようとする姿が見られます。物事を継続してできるということとはとても大切なことだと思います。
- ・居場所。自分らしくいられるところ。不登校になり、不安や不信任感、心身の不調など辛い状態のときも居場所としてありました。どんどん自信を無くしていく中で少しずつ自分らしさを取り戻す事ができたのもゴロ野球を続けられたからだと思っています。一緒に練習する生徒や卒業生、支援者との関わりは他の場所では得ることの出来なかった環境でした。まだ出し切れていない伸びしろが知らず知らずに伸びていくような、失いかけた自信を取り戻せるような…とても大切で必要に思っています。
- ・遊び、学びが両立でき、上下関係の大切さを知ることのできる大切な場です。野球そのものもちろんですが、監督との練習後の関わりは欠かせません。普通小に転向してもゴロ野球に来ることでホッとできる場があり、みんなと共に手にした「優勝」はみんなの絆をさらに強めるものでした。そのチームを全力で支えてくれている支援者には本当に感謝しきれません。そんなゴロ野球が息子にとって一番輝けるスポーツです。
- ・子供ができることの可能性を広げていると思います。監督とのやりとりや、仲間たちとのチームワークをととても楽しそうにして

います。リハビリにも野球を取り込むことで目的をもってできているし、励みになっているようです。

- ・学校に病院、そして家。マンネリ化した生活の中で学年の違う仲間たちとの交流は子ども自身とっても刺激を受けています。ノリノリで行きたい日もあれば、ぐだぐだで行きたくない日もありますが、子どもにとってゴロ野球は生活のメリハリになっています。
- ・身体を動かす良い場である。リハビリとは違い、広い場所で思いっきり走る、遠くへ投げるなどの動作も行える。
- ・集団に属する良い場である。集団に入ることこそ学べることは多く、自分のアピールの仕方、チーム内での立場、役割、チーム全員のことを考えた行動など学校（学年）とはまた違う学びになっていると思います。
- ・スポーツを通して学ぶ良い場である。最初は下手で苦手だったことも練習を重ねる事で少し上達したりフォームを変える事で上手くできたり、また、何度やってもできなくて悔しい思いをする中で、もっと練習しようと思うなどメンタルもきたえられていると思います。
- ・うちの子にもできるスポーツで、週1回、他学年の人達と交流を持って楽しく過ごせる場所がゴロ野球です。
- ・今では家族の大事なイベントの1つ。本人もかなり生活の部分占めている。自分もできる！と認識できる場所でもあり、自分から発信しなければいけないので楽しいばかりではなく、挑戦し続ける場所でもあると思います。

【質問10及び回答】子どもにいつまでゴロ野

球を続けてほしいか質問した結果、「高等部(高校)卒業後も続けてほしい」が12名(75%),「高等部(高校)卒業まで」が2名(12.5%),「小学部卒業まで」が1名(6.%)であった。また、記述なしが1名であった。

【質問11, 12及び回答】 ボランティアの在り方について質問した結果、ほとんどの保護者がボランティアによる支援の必要性を感じており、継続的な参加や子ども達の意欲向上のためのかわりを求めていることがわかった。

【質問13及び回答】 ゴロ野球以外のスポーツを行う上で困っていることを質問した結果、「親の行動力、体力的な問題」「スポーツにチャレンジするキッカケがなかなかつかめない。またその情報を得られない」「スポーツ＝体力勝負、参加条件が厳しい、柔軟な対応がされていないなど、なかなか参加できるスポーツがない」といった意見が見られた。

【質問14】 その他自由記述

【回答】

- ・ ゴロ野球は学校で取り組めて、継続して来てくれる監督や学生さん、コーチもいて先輩たちもいて活気があった。何かさせたいと思ったときに目の前にゴロ野球があったことはありがたかった。OBや先輩の姿をみて、将来なつてほしい姿を思い描いたり我が子の課題を見つけられ、スポーツそのもの以外でも勉強になることが多かった。そして何より、チームを引っ張ってくれる監督が、本当に「楽しい」と思って関わってくれていることに感動した。こんなに素敵な監督には探してもなかなか巡り会えないだろうと思う。この監督が育てた学生さ

んが多く関わって活気づけてくれることもまた恵まれた環境だと感謝しています。これからも子供をよろしくお願いします。

- ・ ゴロ野球以外のスポーツにも興味はあるが、情報が少ないように思う。ゴロ野球に入る時もそうだったが、車椅子の自走も出来ない子に参加は無理だろうと思っている所が親にはあるので、もっとどんな人が参加しているかなどの情報が簡単に入ってくるといいなと思う。
- ・ 毎週ゴロ野球を出来ることを楽しみにしています。ゴロ野球での経験は本人にとって、とてもプラスになっています。負ける悔しさ、勝つ喜び、そしてチームのみんなで1つの目標に向かって練習できること。監督、支援者には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。
- ・ 子どもにはいろいろなことをやらせたいと思いますが、常に付き添いが必要だなかなか難しいのが現状です。ゴロ野球は学校のできるので、付き添いもしやすく、気軽にはじめることができました。楽しんで続けられていることが、親子ともどもうれしく感じます。
- ・ 障害がある事によって活動の幅は狭まり、経験も不足しがちです。ゴロ野球に出合うことによって様々な経験ができましたが、もっと色々なスポーツが気軽に楽しめる環境が整ってくれたらうれしいです。一人一人できる事が違いますが、周りの理解や支援の工夫などで同じスポーツを同じ気持ちで仲間と楽しめることが可能だと思っています。障害があっても無くても生き生きとした毎日を過ごせる環境を与えてあげたいと考えています。

- ・ゴロ野球をすることで良いと思うことは、
単純に楽しみ（張り合い）
新しいことへのチャレンジ
チームプレーによる仲間意識
リハビリ効果
技術向上
目標を持って活動すること
年齢の違う人との関わり
スポーツを通してのマナー
自分に自信をもつ
ゴロ野球の活動がもっと多くの人に伝えられてゴロ仲間が増えると「全国大会」とか夢じゃないと思います！
- ・障害がある、なしに関わらずスポーツなどの体験は幼い時から色々経験が必要だと思います。「やったことがない＝やれない」ではなく、難しければ何か手段を考えて楽しむ事が出来れば良いと思っています。今まで、水泳、スケート（木ぞりに乗ってすべる、木ぞりにつかまってすべる）、チューブすべり、山登り、マラソン、車椅子テニス、ボッチャ、ドッチボール等々体験させてくれることができました。今回、本人がゴロ野球を始めてから初優勝をすることでもっともっと楽しみが増えたように感じます。ここまで本人が楽しんで野球に夢中にさせてくれた監督や、支援者、その他コーチの先生たちに本当に感謝しています。これから弟と一緒によろしく願いいたします。
- ・心身の成長に大いに寄与していると思います。健常児童との交流ができれば新しい意義も生まれるかなとも思っています。
- ・個人の能力に合わせてルールが決められるゴロ野球は障害をもった人たちにとって、

とても素敵なスポーツだと思います。試合は時に判定が難しいこともありますが、見ている側もドキドキするようなドラマがあり感動します。

- ・本当はゴロ野球だけではなく、いろいろなスポーツにチャレンジさせたいと思っています。でも、リハビリ等で時間がない……。どうにか金曜日だけは時間をつくってゴロ野球に参加している状態です。（子供に時間がないのではなく、母にゆとりがないのかも）ゴロ野球のスタッフの皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・ゴロ野球は身体能力の差を考慮されている事から参加しやすいです。メンタル部分も無理強いする事なく、自分のペース、やる気で努力できる事も息子のペースに合っているのかなと思っています。上手くなりたいう気持ちに（対する）アドバイスがあるとやる気に繋がると良いなあと思っています。今はどうしたら上手くなるのかからずにいる様です。
- ・今までたくさんありがとうございました。
- ・ゴロ野球に出会えてことで、本当に変わりました。ゴロ野球をきっかけに、マラソン、テニスなど、スポーツに目覚めることができました。娘には絶対にできないと思っていたことが間違いだったことに気が付いたのは私だけではなく、家族も、友人も、病院の先生方も同じです。「私、ピッチャーで、野球でしょ、マラソンでしょ、テニスもね……」と誇らしげに話をしている彼女は、今までにない自信と希望を持てたのだと思います。でも、本当に成長したのは私達両親だったのかも知れません。出来る事、出来ない事を見極めていたつもりが、いつの間

にか、絶対できる事と失敗しないことだけを見極めてやらせていたのかもしれませんが。ゴロ野球に出会えたこと、すばらしい指導者に出会えた分、周囲の障害者スポーツに対する考え方が違いすぎることも問題点の1つではあると思います。体のことだけ考える医者、自立を考えてスポーツは余暇という学校、スポーツと生活の両方を考えた車椅子・・・など、スポーツに一生懸命になればなるほど溝が深まるばかりです。障害者＝自立が、それだけが大切ではないことをもっとわかってもらい、楽しいから、趣味で・・・という考えではないという事、成長する上でとても重要な役割があるということを学校の先生方にはわかってもらいたいし、伝えていきたいと思います。

- ・毎週楽しくゴロ野球を練習しているようです。最近になって、やっとゴロ野球の流れを理解してきたみたいで、泣いたり怒ったりすることも少なくなってきました。2年生の後半から続けているのですが、ランニング等のおかげでとても足、腰が強くなり、ボールを拾うことも覚えました。そのボールを相手に渡すことも出来るようになりました。出来ることが増え、周りの人からもほめられ、本人もとても嬉しく思っていると思います。これからもどんどん成長して行ってほしいと思います。ボランティアさんと一緒にキャッチボール等練習できると嬉しいです。

V. 考察

肢体不自由特別支援学校の児童生徒が取り組めるスポーツは限定的な現状の中で（笹川

スポーツ財団, 2013), ゴロ野球の取り組みを児童生徒達がまずは何よりも「楽しみ」としてとらえていること、もっと多くの練習に取り組みたいと思っていること、地域のプロ野球チームを応援し、人気選手に憧れを抱いていることも明らかになった。このことは障害があったとしてもスポーツの意義やスポーツへの思い、動機づけは障害のない子ども達と何ら変わりのないことを示している。

保護者アンケートの結果からも、ゴロ野球が子ども達にとっての居場所であったり、大きなやりがい、大切な活動の場になっていると保護者が感じていることが明らかになった。保護者アンケートの自由記述の内容からは、子ども本人の変化はもちろん、家族のスポーツに対する考え方や障害の捉え方の変化が見て取れた。ゴロ野球を始めるまではスポーツは「できない」と保護者や子ども自身も諦めてしまっていた様子も見受けられた。肢体不自由特別支援学校でのスポーツ活動を通して、支援者が障害のある子ども達の「できる」条件を探り、指導にかかわっていくことで、障害のある児童生徒はもちろんその家族も前向きに生活していけるような心理的効果が生じる可能性が今回のアンケート調査の結果から示された。

その一方で、保護者からはもっとより多くのスポーツを経験させたいけれども、その場や情報が少ないという考えが示されていた。ゴロ野球の活動を通した子ども自身や家族の心理的变化を考えると、今後特別支援学校に在籍しているいわゆる重度障害のある児童生徒でも取り組める新たなスポーツの開発や普及が求められる。そのことで、障害のある児童生徒はもちろんその家族のより生き生きと

した生活が実現するものと考えられる。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、アンケートに協力していただき、大変丁寧かつ貴重な思いをよせていただいたゴロ野球チームの選手及び保護者の皆様に心より感謝いたします。

文献

文部科学省：特別支援教育資料(平成25年度).
2014.

和 史朗：重度障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの取り組み—肢体不自由特別支援学校における野球指導を通して—. 北翔大学北方圏障害スポーツセンター年報, 2 : 57-62. 2011.

和 史朗：肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒を対象としたベースボール型競技の指導. 北翔大学生涯スポーツ学部紀要, 6 : 51-58. 2015.

笹川スポーツ財団：文部科学省委託調査『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業（地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究）』報告書. 2014.